

解釈

松浦 純子

正岡子規の有名な俳句に「柿くへば鐘が鳴るなり法隆寺」がある。この俳句に初めて出会った子供が次のように解釈したら、間違いだろうか。

「男の子が柿を食べていたら『早く家に帰れ』と法隆寺の鐘がなった」

「お寺のお坊さんが男の子の動きを見ていて、柿をがぶっとかじりついた瞬間に鐘を鳴らして驚かせた」

「お皿の上に並んだ果物の中から、男の子が考えていた果物と同じのを女の子が食べたら、男の子が『当たり前!』と鐘をついた」

色々な解釈が出てきそうだが、この句に関してはすでに決まった解釈があるので、右のような解釈はテストになるとどれもバツがついてしまう。では、この句を真似して柿ではなく桃にしたら、どのように解釈してもいいのか、また法隆寺ではなく浅草寺だったらどうだろう。

以前中学入試で、「夕暮れの中、男の子は一人停留所でバスが来るのを待っていた」この時の男の子の気持ちはどれがふさわしいか、次の中から選びなさいという問題があった。答えは「暗くなつて不安な気持ち」が正解のようだが、記述で答える場合、「仕事から帰ってくる母親に『早く会って伝えたいな』と、いつものバスが来るのを気をもんで待っている」と書いたらマルをもらえるだろうか。なぜ、背景も何も書いていないたった三十字の文から答えを一つに絞らないといけないのか。私にとってはずっと謎である。

俳句や漢詩など決まりから外れれば、それはもう俳句でも漢詩でもなくなる。だから、右の三十字より短いたった十七文字や二十語（一番短い漢詩の五言絶句）で深い内容を表そうとすればするほど、いろいろな解釈が出てくるはずだ。却っていくつもの解釈ができる作品ほど素晴らしいのではないかとさえ思う。私たちの日々の生活では、二千年以上前に書かれた周の時代の『五経』などの書物を時代に合わせて当初とは異なった意味に解釈し、現代にも生かすことがある。そういうえば、三月末に本クラブで散策した松陰神社に「備えあれば患いなし『書経』」と書かれた紙が貼ってあった。昔は戦いに備え、今は地震に備えると解釈するのがいちばん当てはまりそうだ。